

フランス語初学者の発音指導

— 30 までの数字を使って —

山根 祐佳

1. はじめに

本稿の目的は、フランス語学習者、特に初学者に対する発音指導の際に、数字を利用する方法を紹介し、その有益性を問うことである。

現在では多くの入門や初級のクラスにおいて、コミュニケーション・アプローチが採用されている。口頭運用能力の習得を重視したコミュニケーション・アプローチでは、文法や構文だけでなく、個々の単語の発音に関しても、規範的であることより、コミュニケーションに支障をきたさないことが重要視される。見方を変えれば、コミュニケーションの成立を妨げない範囲であれば、単音（個々の音素）の規範的な調音法（発音の仕方）や音連続の処理をことさら気にすることはなくなり、むしろどちらかといえば、注意はイントネーションやアクセントといったプロソディへと向けられる傾向にある¹。

一方、多くの教科書（特に日本で制作された教科書）では、その冒頭で、フランス語の母音や子音の発音記号を掲げ、体系を説明し、綴り字の読み方をそれに結びつける形で発音に関する情報を提示している。しかしそこで、各音の調音法の詳しい解説や、その練習をする材料が提供されることは稀である。そして多くの場合、この発音を扱った部分は教科書の課や授業内容から独立しており、コミュニケーションな授業内に組み込むことは難しい。

このように、現在の状況では、授業内で個々の単音の習得を目指す発音指導を行うことはあまり想定されていないといえよう。しかしながら、やはり単音の発音指導は、初学者を対象とする授業の重要な要素のひとつである。各音を発音し聞き分けることはコミュニケーションを妨げないために不可欠であり、また学習者が自信を持って発話できるようになるためにも、単音レベルでの発音指導は欠かせない。しかし、だからといって、限られた時間内で行われるコミュニケーションな授業から切り離して、発音の解説や練習のためだけに時間を取ることも困難である。できれば文法や語彙の習得と同様に、できるだけ授業のテーマの一部として発音指導や練習を行うことが理想的であろう。そこで本稿では、単音の範囲を母音に限って、発音指導に利用できる材料を以下のような条

件のもとに模索する²。

1) 全ての母音を含む。

フランス語の母音は鼻母音も含め全部で 16 個とされているが、そのうち必ずしも区別する必要のないものは除き、体系を簡略化した上で 13 個（詳細は後述する）を取り上げる。

2) 発音記号を使わない発音指導を可能にする。

発音記号は非常に便利であるが、一種の表音文字でありその音を再現できない場合には無用の長物である。また最近では高校や中学の英語の授業で使用されることがほとんどなく、学習者にはあまり馴染みがないようである。そのためか、文字と混同してしまうケースも見受けられるため、発音記号を使用しないことを条件とする。

3) 初学者が習う必要があるもので、内容が込み入っておらずシンプルである。

発音に注意が向けられるよう、複雑な内容（文法や構文など）を含んでいないものが理想的であろう。また発音練習のために特別に覚えるのではなく、それ自体を身につける必要や価値があるものが望ましい。

4) コミュニカティブな授業の中に組み込むことができる。

発音の練習だけを目的として掲げることなく、できるだけ授業の進行やアクティビティを妨げない形で調音法の解説や指導を行うことを目指す。

5) その材料をテーマとしない授業においても、発音指導に利用できる。

授業の様々な場面で学習者の発音を矯正したり、注意を促す際に発音記号の代わりに提示したり、調音法や音色を確認できるようなものであれば、長期にわたり発音指導に使うことができる。

まず、第 1 の条件に関わる指導の対象とする母音を考える。

2. 発音の指導を行う母音

フランス語の母音体系は、口腔母音 12 個（前舌、複合、後舌各 4 個）、鼻母音 4 個の計 16 個で構成されており、開口度と調音点により表 1 のように分類される³。

このうち、下線を施した 3 つの母音は初学者の発音指導から除外することができる。複合母音列の脱落性を持つ [ə] (e caduc/muet) は、フランス語独特のリズムを左右するものでありまたその扱ひも複雑である。しかし音色としては、同じ複合母音列 3 番目の [œ] と大きく変わらない。そ

表 1 口腔母音と鼻母音

開口度	前舌母音	複合母音	後舌母音
小	i	y	u
やや小	e	ø	o/õ
やや大	ɛ/ĕ	œ/ <u>œ</u> ə	ɔ
大	a		<u>a</u> /ā

のため、学習が進み脱落の規則などを学ぶ際に改めて練習する機会を待ち、当初は [œ] と同じ音として扱うこととする。さらに後舌母音の開口度の最も広い [ɑ] は現代の標準フランス語では特定に語においてのみ使われており、前舌母音の [a] と区別をする必要はほとんどない。鼻母音においても、複合母音の [œ̃] は前舌母音の [ɛ̃] で代用することが可能である。したがって指導の対象となる母音は、表2に示す13個となる⁴。

表2 指導の対象となる口腔母音と鼻母音

前舌母音	複合母音	後舌母音
i	y	u
e	ø	o/õ
ɛ/ĕ	œ	ɔ
a		ɑ

3. 指導に使う材料

上記の13の母音の指導に使う材料として、どのようなものが考えられるだろうか。第3の条件にあげたように、初学者が必ず学ぶ必要があり内容が複雑でないものとして、まずはじめに考えつくのはアルファベである。

3.1. アルファベ

アルファベは、学習者が最初に習うもののひとつであり、文字の名称を覚えるだけなので発音に注意を向けやすい。

ではアルファベは母音の発音指導の材料にふさわしいだろうか。

母音とアルファベの関係をまとめた表3にあるように、アルファベに含まれる母音には、かなり偏りがある。前舌母音は4つ揃っているが、複合母音と後舌母音はそれぞれ2つしかなく、また鼻母音も含まれていない。したがってアルファベは母音13個を提示するという第1の条件を満たしていない。また内容は複雑ではないが、アルファベは文字の名称であり、文字との結びつきが強い。

表3 母音とアルファベット

	前舌母音				複合母音		後舌母音							
口腔母音	i	I	J	X	Y	y	Q	U	u	W				
	e	B	C	D	G	P	T	V	W	ø	—	o	O	
	ɛ	F	L	M	N	R	S	Y	Z	œ <ə>	E [ə]	W [ə]	ɔ	—
	a <ɑ>	A				H	K							
鼻母音	ĕ <œ̃>	—										õ/ã	—	

そのため、それを発音指導に利用することで、綴り字を読んだり、単音と綴り字の関係（文字の音価）を覚えたりする時にかえって混乱を招き、悪影響を与えることが懸念される。この二つの理由からアルファベは発音指導の材料としてふさわしいものではないと判断される。

アルファベを使って学習者の注意を喚起することができる調音法の要素がひとつある。開口度である。日本人学習者は口を開けることに抵抗を感じるのか、開口度を大きくすることが苦手である。アルファベ導入のときから、特に開口度の大きな母音（とりわけ前舌母音）のときに、開口度を大きく取るよう指導することにより、口を開けることに慣れさせる効果があると考えられる。

3.2. 数字

次に初学者が早い時期に習うものとして、数字が考えられる。教科書によっては一度にかなり大きな数まで提示するものもあるが、実際の授業では、例えば0-10、11-20のようにある程度区切って導入し定着させる、という形をとることが多い。表4は数字0から10と母音の対応を表している。この表に示されているように、1の男性形と女性形を共に導入すると、0から10の数字で、鼻母音も含め、前舌母音と複合母音はすべてカバーできる。

表4 数字0-10と母音

	前舌母音		複合母音		後舌母音	
口腔母音	i	6, 8, 10	y	1	u	—
	e	0	ø	2	o	0
	ɛ	7	œ (ə)	9	ɔ	—
	a (ɑ)	3, 4				
鼻母音	ɛ̃ (œ̃)	1, 5			õ/ã	—

さらに10までには現れない口腔母音の後舌母音 [u] は12, [ɔ] は14, また鼻母音 [õ] は11で導入できる。したがって、少なくとも14まで導入した時点で、鼻母音 [ã] を除く指導対象の母音はすべて提示できることになる。例えば、数字の学習を20で一区切りさせるのであれば、表5のようになる。鼻母音 [ã] は30を待たなければならないので、(30)として加えておく。この表に見るように、20まで進んだ時点で30も合わせて導入すれば、かなり早い段階で必要な母音をすべて提示し練習することが可能となる。

このように提示するべきすべての母音を含む数字0から14と30は、先ほどあげた第1の条件は満たしているが、その他の条件についてはどうであろうか。5つの条件をもう一度見てみよう。

- 1) 全ての母音を全て含む。
- 2) 発音記号を使わない発音指導を可能にする。
- 3) 初学者が習う必要があるもので、内容が込み入っておらずシンプルである。
- 4) コミュニカティブな授業の中に組み込むことができる。

表5 数字0-20・30と母音

	前舌母音		複合母音		後舌母音	
	口腔母音	i	6, 8, 10, 17, 18, 19	y	1	u
e		0	ø	2	o	0
ɛ		7, 13, 16, 17	œ <ə>	9, 19	ɔ	14
a <ɑ>		3, 4, 14	/		/	
鼻母音	ɛ̃ <œ̃>	1, 5, 15, 20	/		õ	11
			/		ã	(30)

5) その材料をテーマとしない授業においても、発音指導に利用できる。

第2,3の条件も満たされているといえよう。数字を導入しながら母音を提示していくため、発音記号は使用しない。また、材料とする数字は、0と14以外は母音をひとつしか含まないため、数字を言ったり書いたりすることで各母音を提示することが可能である。すなわち発音記号と同じように母音を表す「記号」として用いることができる。例えば授業内で、発音記号の [i] を用いる代わりに「6の母音」と言ったり「6」と黒板に書くことによって母音を示すことが可能になる。さらに、数字は、内容的にはシンプルで発音に注意を向けさせやすく、初学者が覚える必要のある基本的な項目である。

では、残りのふたつの条件はどうであろうか。これらの条件を満たすか否かは、教材としての数字をどのように授業で扱うか、と大きく関わることになる。

4. 数字を材料とした母音の導入と実際の授業

コミュニケーション的な授業の中で発音を指導するためには、文法事項など他の項目と同様に、授業プログラムに発音指導を組み込み、到達目標を立てて準備をする必要がある。学習者の発話ごとに、教員が気づいたことを修正しているだけでは体系だった指導にはならず、学習者もその場では直すが、同じことを繰り返すことになることが多い。また学習者にとっては、まず音色に慣れ、調音法(開口度や舌の位置、唇の形)をある程度理解し、練習する時間が必要となることは言うまでもない。そしてそれらを「発音の時間」として他から切り離すのではなく、上述の第4の条件にもあげたように、できるだけ授業の流れの中で行うことが望ましい。そこで数字を使った母音の発音指導をできるだけコミュニケーション的な授業に組み込む方法を考えてみたい。以下数字を使う前の準備段階から順に提案する。

4.1. 準備段階 (アルファベ)

アルファベは、含まれる母音の種類に限りがあるため、母音の発音指導の材料に不向きであることは先述の通りである。しかし、アルファベを練習しながら、調音の大切な要素のひとつである「開

口度」に学習者の注意を向けることができる。表3に示したように、前舌母音は全てアルファベに含まれており、数も多い。前舌母音を含むアルファベを発音するたびに「口を開ける」や「顎を下げる」といった指示をし、開口度を少なくとも3段階に調整できるように準備をしておくと、その後の指導がスムーズである。またアルファベの練習をしながら、同じ母音を含むものを連続して発音する(A-H-K, B-C-D-G-P-T-V-Wなど)ことなどにより、母音への注意を促すことなども重要であろう。

4.2. 0 から 10 の導入と前舌母音の導入

多くのクラスでは、数字はいくつかのグループに区切って提示され、定着させるよう授業に組み込まれている。そこで0から10を提示する際に、あわせて前舌母音を導入する。つまり、学習者にとっての目標である「0から10までの数字を覚える」の後ろに「前舌母音の調音法の理解と練習」という発音に関する目標を設定するのである。

まず、0から10の数字のモデルの発音を真似る際に、母音の真似を意識するよう指導する。調音点と開口度、唇の形を指導し、そこに注意を向けると音色がモデルに近づくことを学習者に自覚させる。そのようにしながら、4つの前舌母音をそれを含む数字(0/3/4/6/7/8/10)の中で練習し定着させる⁵。

授業内では、母音の調音法の解説をまとめて行うことはせず、あくまでも、数字のモデルを真似る、あるいは数字を発音する際の発音指導として、その時に必要な母音の調音法を紹介する。または、学習者の発音を修正するタイミングを見計らって、調音法の説明を行う。こうすることで、発音指導を授業のテーマから切り離さず、学習内容に沿った形で行うことが可能になる。例えば、6や10の[i]を日本語より開口度を狭く鋭く発音するように指導し[i]の音色を覚えさせる、また7/0や、6/0/7/4と続けて発音させることで開口度の違いに気づかせる、など、数字の発音練習をしつつ前舌母音の練習を行う。

その一方で、前舌母音以外の母音(0の2音節目、1の女性形(une)、2や9)についてはあまり注意をせず、モデルの真似をするように指摘するにとどめておく。

4.3. 0 から 10 の復習と複合母音の導入

0から10を導入、練習した授業の次の回で、0から10の復習をする際に、あわせて1の女性形(une)、2、9を使って複合母音を導入する。手順は前回と同様に、学習者のこれらの数字の発音を修正する機会を利用して、それぞれの調音法を説明する。さらに余裕があれば、1(un)と5を利用して、鼻母音の音色に注意を向けておく。

4.4. 11 から 20, 30 の導入と後舌母音、鼻母音

11から20では、12と14を用いて後舌母音を導入する。この時に、0の2音節目と14の2音節

目の開口度の違いに注意を促すこともできるだろう。さらに、11, 15, 20 で鼻母音を導入する。あわせて 30 を導入すると、指導の対象とする 13 の母音をすべて提示できる。

さらに、次の授業で 0 から 20, 30 の復習をする際には、数字の復習だけでなく、母音の発音にも注意を向けるように工夫する。例えば、発音を矯正する際に同じ母音を含む別の数字を使ったり、同じ母音を含む数字を探させるアクティビティを準備するなど、学習者が数字と母音を結びつけて記憶することができるよう心がける。

以上のように、数字の提示と練習、定着といった一連の学習を進めながら、それらを材料に、母音の調音法や音色を習得させることを意識し指導することによって、「発音の時間」を設けなくとも、調音法の説明や発音練習を行うことができる。すなわち第 4 の条件を満たすことが可能になるのである。

5. 別のテーマへの応用

4 章で提案したような方法で母音を数字とともに提示し練習した次の段階は、数字以外をテーマとした授業でも、発音を整えるために数字を使用することである。こうすることで、数字は第 5 の条件「その材料がテーマでない授業においても、発音指導に利用できる」を満たす材料となりうる。ここでは初学者向けの学習テーマである自己紹介や動詞の活用を例に、その方法を考えてみたい。

5.1. 簡単な自己紹介や国名、国籍

初回の授業で 0 から 10 までを用いて前舌母音を導入し練習した後に、次のような簡単な自己紹介をテーマに授業を進めるとしよう。そこでは、すでに導入済みの前舌母音を主に矯正の対象とする。

Je m'appelle ... (Moi, c'est ...) Je suis japonais. Je suis étudiant.

学習者が appelle や japonais の [ɛ] を「エイ」のように二重母音で発音した場合には、数字の 7 を黒板に書いたり、言わせたりして、それと同じ音を出すように促す。Moi を「モイ」と読んだり、suis の発音がうまくできない場合には、それぞれ、3 と 8 を黒板に書き、音を思い出させる手段とする。一方 30 が未導入の段階では、étudiant の鼻母音は、モデルの真似をさせるにとどめておき、矯正の対象としない方がよいであろう。

また、国名や国籍をテーマとする授業の前に数字を 30 まで練習し、鼻母音を導入しておく、国名の前の前置詞 (en)、国籍の語尾 (italien, allemand) などを定着させる手段となる。特に coréen/coréene のような語の男性形、女性形の語尾は、鼻母音と口腔母音の区別をつけるためにも有効である。

5.2. 動詞の活用

動詞の活用の発音練習の際にも、数字を用いることができる。例えば、数字と **avoir** の活用の関係は表6のようになる。これを利用し、**il** と **elle** の最初の母音の違いがはっきりしない場合には、6と7を用いて違いを理解させる。また、**nous**、**vous** の母音は12と同じであると伝える、など、発音記号代わりに数字を利用することが可能である。

表6 数字0-30と **avoir** の活用

j'ai	0	nous avons	12 4 11
tu as	1 4	vous avez	12 4 0
il a	6 4	ils ont	6 11
elle a	7 4	elles ont	7 11

さらに、動詞の活用を導入したのち、学習者自身に同じ母音を含む数字を発見させるなどのアクティビティを行うことによって、違いが曖昧になりがちな部分について発音を確認することも可能である。例えば、**prendre** の活用を導入し、人称ごとの動詞部分と同じ母音を含む数字を尋ねる。すると単数人称はすべて30、**nous prenons** は9と11、**vous prenez** は9と0、**ils/elles prennent** は7となり、語幹の発音の違いを確認することができる⁶。

このように、様々なテーマの授業内で学習者の発音を修正する際に、モデルの模倣をさせるだけでなく、学習者がみずから、音色や調音法を思い出すことを促すための手段として数字を用いる。これによって第5の条件は満たされるであろう。

6. おわりに

初学者に対して、母音の調音法の説明や練習を授業内容から切り離さず、また発音記号を使わず発音指導を行うための材料として、数字(0から30)を用いることを提案した。数字を実際に発音指導に利用すると、本稿であげた5つの条件を満たすだけでなく、他にもメリットがあるように感じられる。まず学習者に母音の調音法を思い出させる際に、数字を黒板に書くことだけでなく、日本語で数字を伝えることができるため、手軽で時間がかからない、という点である。さらに母音の音色や調音法を単音単位ではなく、意味のある単語として記憶することにより、定着が良くなるように思われる。また、数字はモデルを簡単に聞くことができるため(ほとんどの教科書の付属の音源には数字が収録されている)、学習者はいつでも発音の復習や確認ができる、という点もあげられるだろう。今後はこの方法の実践をさらに進め、練習問題への応用なども考えてみたい。

[注]

- 1 詳しくは菊地 (2014, pp. 14-16)。コミュニケーション・アプローチにおける発音練習の位置付けの変遷が詳しく論じられている。
- 2 単音として練習をする必要がある, という点では母音と子音には区別はないが, 音節やリズムグループ, アクセントといったプロソディを身につけるためにも, 母音の安定は不可欠である。
- 3 多くの辞書などで [ʒ] の鼻母音と表記される音素を, 本論ではより音色に近い [o] の鼻母音である [õ] と表記する。
- 4 さらに簡略化するならば, 各列の上から2段目と3段目(前舌の [e] と [ɛ], 複合の [ø] と [œ], 後舌の [o] と [ɔ]) は対立を維持する必要がある状況が少ないため, 必ずしも必要ではない。詳細は菊地 (2014, pp.111-117)
- 5 余裕があれば, *trois* や *huit* では, 母音だけでなく半子音を含む音節 [ʒi] [wa] も強調しておくが良い。
- 6 2章で述べたように複合母音列の [ə] は [œ] と同じ音として扱う。

[参考文献]

- 菊地歌子 (2014) 『フランス語発音指導法入門』 関西大学出版局
- 菊地歌子, 山根祐佳 (2010) 『フランス語発音トレーニング』 白水社
- 吉田研作 (1998) 「コミュニケーション・アプローチと授業実践」『フランス語教育』 26, 日本フランス語教育学会, pp. 15-24.